地歴公民科（世界史B）学習指導案

実施日時　　平成27年12月11日(金)１校時
場　　所　　206教室（講義棟２階）
対　　象　　普通科世界史B選択者　13名
教 科 書　　『詳説　世界史』(山川出版社)
副 教 材　　『歴史風景観　世界史のミュージアム』(東京法令出版)
授 業 者　　伊 東　 和 輝

1　単元名
第５章　ヨーロッパ世界の形成と発展
　　３　西ヨーロッパ中世世界の変容

2　教材観
11～13 世紀の西欧においては，封建社会が安定し，農業技術の革新や商業の発達，宗教的情熱の高揚を背景に西欧世界を四方に拡大していこうとする動きが生じた。本単元は，この時代にとりわけ大規模な活動として位置づけられる十字軍遠征を中心に取り扱い，西欧世界における経済・宗教・政治・文化が，これまでの世界史の流れとは一変し，近代的国家形成の一歩が踏み出されるきっかけとなったことを考察させる分野である。現代社会に通ずる国家形成の萌芽期であること，また以降十字軍の名は，キリスト教とイスラームの対立を表現するものとして現在でもしばしば用いられていること，更には今なお両者には深い遺恨があり，それが現代社会の諸問題の根源にもなっていることも生徒には理解させたい。

3　生徒観
本校は単位制高校であり，生徒が自身の興味・関心や進路目標に合わせて時間割を作成し，学年を超えて授業を受講する。そのため，この授業には２年生にあたる中間年次生が11名，３年生にあたる卒業年次生が２名受講している。世界史Ａをすでに履修し終え，さらに世界史Ｂを受講している生徒が８名，10 月の後期から入学してきた生徒が３名，大学入試センター試験で世界史の受験を考えている生徒が３名と学習状況の差が大きく，理解度にもばらつきがある。授業においては，学年も違うこともあり全体的に控え目な生徒が多いが，積極的に質問に答えようとする生徒もいる。また，知識・理解に関する学力は身に付けつつあるものの，歴史的事象に関して自ら思考・判断・表現することには不慣れである。そのため，資料を活用し多面的・多角的に思考・判断し，討議や発表等によって表現させる言語活動を，指導事項に沿って充実させる授業展開の工夫が必要である。

4　単元の目標
11～13 世紀の西ヨーロッパ世界の形成と変動を，経済・宗教・政治・文化の相互関係の中で理解するとともに，それらを通して歴史的事象を多面的に考察する力を身に付ける。

5　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
西ヨーロッパ中世世界に対する関心を高め，諸地域世界の動向や変容を意欲的に追究しようとしている。	西ヨーロッパ中世世界の形成と展開および西ヨーロッパ文明の特色を多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。	諸地域世界の接触や交流に関する資料から有用な情報を適切に選択して図表にまとめるなどして，西ヨーロッパ中世世界の動向を空間的なつながりに着目して整理している。	西ヨーロッパ中世世界の形成と展開の過程についての基本的な事項をキリスト教との関連を踏まえて把握し，その知識を身に付けている。

6　単元の指導計画（全10回　※90分授業）

第５章　ヨーロッパ世界の形成と発展

1　西ヨーロッパ世界の成立（90分×４回）

2　東ヨーロッパ世界の成立（90分×１回）

3　西ヨーロッパ中世世界の変容（90分×４回）・・・本時（１/４）

4　西ヨーロッパの中世文化（90分×１回）

7　本時の指導計画

(1)　本時の目標

ア　十字軍について関心を高め，要点の整理やグループ討議に意欲的に取り組み，西ヨーロッパ中世世界の変容を意欲的に追究する。

イ　十字軍に関する諸資料を活用し，十字軍の実態や参加者の思惑を考察し，他者との討議を行い，自らの意見をまとめる。

(2)　本時の展開（本時の指導計画：90分）

過程	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 (15)	・　出席確認 ・　国際人道支援団体である赤十字社と赤新月社の標章の違いとその理由を団体の分布図から考察する。 ・　11世紀頃の社会の変容，イスラーム勢力の台頭と領土拡大について理解する。 ・　ウルバヌス２世の演説とクレルモン宗教会議の決議から十字軍の目的を読み取り話し合う。（個人→グループ） ・　学習課題を理解する。 【学習課題】 十字軍という戦いは聖なる戦いだったのか。	・　時間厳守，IDカード着用の徹底。 ・　イスラームにとって赤十字は十字軍を連想させるため，標章を変えていることを説明し，本時の学習内容への動機付けを行う。 ・　社会の変容と周辺諸国の変動により西欧世界の拡大の動きが生まれたことを掴ませる。 ・　長きに渡る十字軍が徹底した信念のもとで行われていたわけではないことに着目させる為に，開始時の目的を明確に伝える。	関心・意欲・態度 資料活用の技能 思考・判断・表現
展開Ⅰ (45)	・　第１回十字軍までの経過を理解する。 各十字軍遠征の実態はどのようなものだったのか。 ・　小グループに分かれ，割り当てられた各十字軍（第３回，第４回，第５回，第６・７回）の内容を，資料をもとに話し合いながらまとめる。（グループ） ・　第３回十字軍から順にまとめたものをグループごとに発表し，十字軍の全体の内容を把握する。	・　次の活動である各グループでの調べ学習が円滑に進むために，調べるポイントを強調して説明をする。 ・　資料を丸写しするのではなく，要点を絞ってまとめるよう注意し，まとめた内容はプロジェクターで拡大投影するので綺麗に見やすくまとめるよう指導する。 ・　十字軍の実態の多種多様さに気づかせる為に，他にも民衆十字軍や少年十字軍があったことも説明する。 ・　発表者以外の生徒はプリントに板書事項を写すよう指示する。	思考・判断・表現 資料活用の技能 関心・意欲・態度

展開Ⅱ(25)	十字軍参加者たちの思惑はどのようなものだったのか。		
	・　参加者や目的地の異なる十字軍の遠征が繰り返されたかについて，資料をもとに考え，グループで討議し，発表する。(グループ)	・　宗教的情熱のもとに行われた聖なる戦いという大義名分のもとに，その裏には教皇・国王・諸侯・商人・農民の各々の動機が複雑に絡みあっていたことを理解させる。	思考・判断・表現 資料活用の技能
	・　当時の西欧側の資料とイスラーム側の資料，2000年に行われたローマ教皇ヨハネ＝パウロ２世の十字軍に関する懺悔についてのＶＴＲを見て，十字軍の戦闘の実態について読み取る。	・　十字軍の蛮行とイスラームの当時の状況を知ることで，一面だけを取り上げた歴史認識の危うさに気付かせる。	思考・判断・表現
	・　学習課題に立ち戻り，十字軍とは聖なる戦いだったかについてグループで意見をまとめ，まとめ発表する。(グループ)	・　本時学習前のイメージとも比較しながら，他者の意見も賛同した点は取り入れてまとめるよう指示する。	思考・判断・表現
	【課題解決】 十字軍は，異教徒に侵略されている東方キリスト教徒の救済と，異教徒に奪われている聖地イェルサレムの奪還という使命を帯びた，神のための正義の戦い，聖なる戦いとして始まったものである。確かに，一途な信仰心や純粋な宗教的情熱をもって臨んだ参加者も多く，十字軍の第一の動機が宗教的なものであったことは疑う余地はないが，その侵攻の実態は，キリスト教世界の解放という大義名分のもとに野蛮で残忍な愚行が繰り返され，また教皇や国王，諸侯，商人，庶民らの不純な思惑が複雑に絡み合っていたものである。さらに十字軍は，イスラーム側からみればこれまで穏便に関わり合い，互いに住み分けていたはずの異教徒たちが突如侵入を始め，残虐と破壊の限りを尽くすという恐ろしい侵略戦争でもあった。 以上のことから，十字軍遠征は，純粋な宗教的動機だけで行われたものでもなければ，イスラーム側から見ればただの侵略であり，聖なる戦いと呼べるようなものではないとも言える。（さらに言えば戦争とは往々にして他方の正義と他方の正義のぶつかり合いであり，見る側面の違いによってその正しさは異なってくるものである。十字軍遠征においても，現代世界で繰り返されている戦争においても，聖なる戦いなどというものはこの世に存在しないのではないかということも視野にいれておきたい。）		
終末(5)	・　次時の見通しを立てる。	・　西洋からの視点を中心に歴史は学ぶ機会が多いために，その歴史観は公平さを欠きがちである。偏らず，多面から学ぶことで異なる歴史観があることに気付かせる。 ・　十字軍が西欧に与えた影響について学習することを伝える。	関心・意欲・態度

(3)　本時の評価規準

ア　十字軍について関心を高め，要点の整理やグループ討議に意欲的に取り組み，西ヨーロッパ中世世界の変容を意欲的に追究できたか。　【関心・意欲・態度】

イ　十字軍に関する諸資料を活用し，十字軍の実態や参加者の思惑を考察し，他者との討議を行い，自らの意見をまとめることができたか。【思考・判断・表現】【資料活用の技能】

８　研究授業を終えて

今回の研究授業や今年度の普段の授業においてアクティブ・ラーニングの要素を取り込んだ授業の研究を中心に行ってきた。研修等でも生徒の思考力・判断力・表現力を育成することが今後より求められることを学び，今までの指導方法で有効な部分は残しつつも，言語活動の充実を図り，生徒に現代社会で生き抜くうえで有用な力を身に付けさせていきたいと思い，本授業まで取り組んだ。研究の成果としては，今まで受け身であった生徒たちや，答えを待っていた生徒たちが，少しずつではあるが資料を読み取り自分の考えをまとめようとしたり，生徒同士で話し合いながら答えを導こうとしたりする姿が見られるようになったところが挙げられる。生徒にアンケート等を取ると歴史科目は暗記教科と位置付けられ，面白くないと感じている生徒が多いが，今後，より言語活動を充実させた授業展開ができれば，歴史的事象に対する「なぜ？」を追究し，もっと学びたいという意欲が増し，自ら学ぶ姿勢を育めるのではないかと感じた。また，本校の実態として生徒一人ひとり時間割が異なり，同じ授業を受ける生徒同士が年齢も違い，お互い知り合いではないという状況であり，その中で話し合い活動等をすることに私自身が不安を感じていた。しかし，生徒同士の関係は自分が思っている以上に柔軟で，回数を重ねるごとに話し合い等が積極的にできていったので，教員の判断で消極的になるのではなく，生徒に任せてみることも必要であると分かった。実社会に出れば初対面の人と会議や意見交換を求められる場面も多々あるので，キャリア教育の観点からも有効であると感じた。また，その他の成果として，後日研究授業の残りの部分を授業した中で，資料によって歴史の見方が変わったり，西洋からの視点で歴史を学ぶ機会が多いため，公平さを持って判断するには多面的な見方が必要なことなどを強調することができ，生徒が歴史を学ぶ上での前提に揺さぶりをかけることができた点などが挙げられる。

研究授業においては課題が山積となった。まず本校は 90 分授業ということで２コマ分の授業と捉え，展開を二本柱で考えた。旧来，講義形式での授業であれば２コマ分の授業で終わる内容であったため，その半分の内容をグループ討議等を交えながら展開しても時間内で終わると想定した時間配分で考えたが，大幅に時間が足りず，展開Ｉで終了してしまった。研修の中でも話があったが，ただ活動をすればいいというわけではなく，本時の目標を達成する，生徒に身に付けさせたい力に直結する部分での言語活動を充実しなければならなかったと反省した。今回の授業で言えば十字軍の目的をウルバヌス２世の資料から読み取る課題は展開Ⅱの十字軍参加者の思惑と当初の目的のズレに注目させることと，聖なる戦いと位置付けられていたことが重要であるので，その部分だけの読み取りでもよかったと思った。また各回の十字軍遠征の実態もグループでまとめさせる作業を行ったが，ここは講義形式で進み，十字軍の多様性に着目させるだけでもよかったかもしれない。講義形式の部分と言語活動を取り入れる部分の選定とバランスをどうしていくかが一番の課題であったと感じた。さらに今後の課題としては，このような学習形態でどれだけ知識が定着しているのか経過観察するとともに，定期考査の問題形式やグループ学習の評価の仕方をどうするべきかなども検討していかなければならない。

最後に，自身の授業力向上，ひいては生徒の力をより伸ばすことができるようになりたいと思い参加させていただいた研修であったが，勤務校の先生方はもちろん，指導主事や研究主事，授業力向上研究員の先生方，さらに授業参観に来ていただいた先生方に数多くのご指導やご指摘いただき大変勉強になった。指導案作りやアクティブ・ラーニングの技法など今まで知らなかったことなど学ばせていただき，またより一層授業研究への意欲を持つことができた。今後も向上心を忘れずに取り組んでいきたい。